浜松医科大学のサッカーチームと交流試合

難民となって30年が経過した2005年4月30日、子供たちがこの日を忘れないように行った祖国記念式典

静岡大学の留学生と。右がミンさん。三方原協働センターで子供のお祭りをしたとき

相談をしました。古橋さんはいろんな会社を知っていたので、仕事を紹介してくれたり、団地の手続きを手伝ってくれたりしました。それで、みんなどんどん来る。浜松はやっぱり工業地帯だから仕事もある。それに暖かい。みんな、浜松は日本のカリフォルニアと言いますね（笑）。古橋さんと会ったのは、こっちに来てからです。最初私は、本当にボランティアの方？って。ベトナム政府機関と関係のある方かもしれないと思いました。だから最初はあんまり話しませんでした。でも、古橋さんもいろんな手助けをしてくれたので、だんだん信頼していきました。

――その後、静岡県ベトナム人協会ができたんですね。

はい。1986年くらいかな、初代の会長の家に集まってベトナム人協会を作ろうかなと。そのとき、私はメンバーで副会長でした。最初に集まったのはだいたい20人位ですね。目的はベトナム人同士の助け合いです。やっぱり外国に住んでる外国人は、自分も大変だったので、みんなでそういう会を作ろうと思いましたね。

――ミンさんは二代目の会長ですね。いつからですか？

初代のトゥルンさんは、だいたい1年、2年近くやって、その後、私が受けました。

――ベトナム人協会は活動が幅広いですよね。最初はどんな活動をしていたんですか？

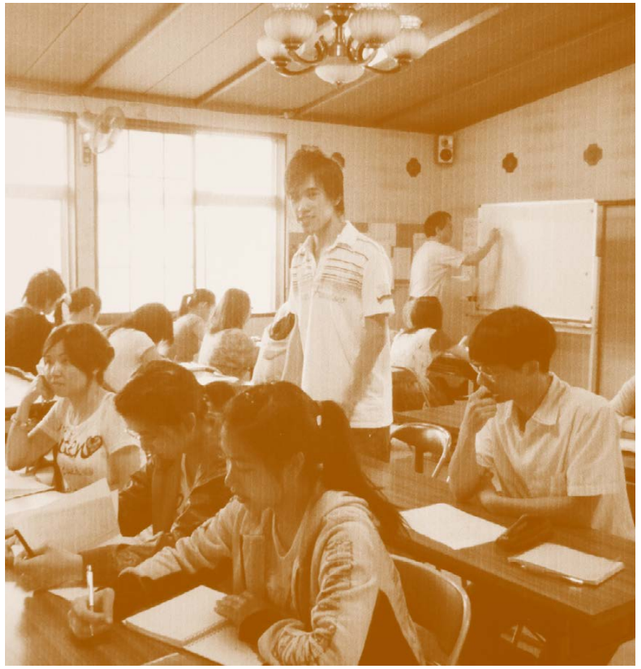
ベトナム人の生活の手助けでできることは何でもしました。日本で生活したり仕事したりするのに車の運転が必要なので、運転免許証を取る勉強も。警察官に来てもらって、教えてもらったこともありますね。日本語教室もやりましたね。

それから、ベトナムの習慣、テト（旧正月のお祝い）をやることですね。子供たちのサッカーチームもできました。沼津でサッカー大会にも参加しました。私たち大人もサッカーチームができて、浜松医科大学など他のチームとも交流しました。それと、HICEとの関係も始まりましたね。

――HICEとの関係が始まったのは、結婚式ですね。

結婚式は1989年です。HICEの国際交流イベントで、私の夫婦ともう一組のベトナム人夫婦の結婚式をしたんです。

結婚式の様子。右から4人目がミンさん。2人目は古橋楓さん



文化庁委託事業の日本語教室。三方原教会には学習に来るベトナム人が大勢集まる

勤めていた会社の社長さんも来てくれました。新聞にも載りました。

――その写真も、新聞記事もHICEに残っていたので見ましたが、大きなイベントのようでしたね。最近のベトナム人協会の活動を教えていただけますか？

在留資格関係の相談など、いろいろな相談を受けています。子供の教育支援にも力を入れていて、HICEのベトナム人子供教室もやっています。今は大学に入る人も多いですから、みんな教育に熱心ですね。一方で学校になじまない子供もいるのでそれは心配…。日本国籍を取得した人もいっぱいいます。三方原にベトナム人が集まる教会があって、そこで文化庁の補助金をもらいながら日本語教室もやっています。

――浜松にいるベトナムの人の皆さんはほとんど日本語ができますか？

子供たちは問題ないですが、大人はまだちょっと難しいかな。でも、みんな仕事が忙しくあんまり勉強する時間がないですね。

――ミンさんや、難民で来た人はベトナムに何回か帰っていますか？

何回も帰った人もいますよ。私は病気になった人を送ってベトナムに一緒に行ったことがありますが、怖いので、ふるさとには帰ってないです。そのとき父は既に亡くなっていたので、父とは亡くなる前にアメリカで会ったきりです。母とは三十何年も会わずに亡くなりました。ふるさとにも帰ってみたいですが、怖いです。先月、弟と兄がベトナムにある両親のお墓の写真を撮って送ってくれました。

――そうですよね、お墓がありますもんね。ふるさとのこと、気になりますよね。では、ミンさん自身の将来の夢とか、ベトナム人協会としてこれから何か考えていることありますか？

私の？夢というのは、ほとんどないかな。でも、今の子供たちの中には、ベトナム難民の理由を知らない子もいます。本当はこういう風に自分のことを話すのは戸惑いがあったけど、子供たちに伝えていく必要があるので引き受けました。

それから、ベトナム人協会はこれからも続けたいと思いますね。私たちは外国人だから、今でも生活の中でいろいろな問題が起こっています。協会としていろんな相談に対応できるといいなと思いますね。

（※1）ベンチェ省（Tỉnh Bến Tre）はベトナムのメコンデルタにある。省都はベンチェ。ホーチミン市の南西約86kmに位置。

（※2）ベトナムの独立と統一をめぐる戦争。1960年結成された南ベトナム解放民族戦線は、北ベトナムの支援のもとに、南ベトナム軍およびこれを支援するアメリカ軍と戦い、69年臨時革命政府を樹立。73年和平協定が成立しアメリカ軍が撤退、75年南ベトナム政府が崩壊、南北が統一された。（大辞林、1989三省堂）

（※3）1975年4月のサイゴン陥落でベトナム戦争は終結したが、その前後から南ベトナム政府や軍の関係者、資産家など新しい社会主義体制の下で迫害を受ける恐れのある人々や新体制に不安や不信をもつ人々が大量に国外に流出を始めた。（難民事業本部 http://www.rhq.go.jp/japanese/know/i-nanmin.htm）

（※4）最初のボート・ピープルの上陸直後から日本各地の民間団体が施設を難民に住居として提供したり、既存の施設を借りて受入れ施設の運営を行ったりした。（難民事業本部 http://www.rhq.go.jp/japanese/know/i-nanmin.htm）天理教日野ベトナム難民施設は、1976年9月法務省より難民受け入れ要請を受け、1977年4月天理教日野ベトナム難民施設を開設（天理教国際たすけあいネット http://kaiga.tenrikyo.or.jp/t_net/?page_id=22）

（※5）国際救援センターは、1983年4月ボート・ピープルの流入増と滞留の長期化に対処するため開設され、日本定住を希望しない者や第三国への出国が決定した者と日本定住が決定した者が入所した。（難民事業本部 http://www.rhq.go.jp/japanese/know/i-nanmin.htm）

（※6）1982年1月1日「出入国管理及び難民認定法」施行のことか。（難民事業本部 http://www.rhq.go.jp/japanese/know/ukeire.htm）

（※7）センターに入らずに施設から直接日本社会に定住する人々もいた。民間団体による受け入れ施設のあった地域では、第三国へ定住できずに長期滞留する難民たちが仕事をしたり、子供たちが学校に通学したりもした。（難民事業本部 http://www.rhq.go.jp/japanese/know/i-nanmin.htm）

（※8）1998年頃には、舗装されていない道路の道端で男性たちが氷入りビールを飲みながら、三目並べのようなゲームをしている姿をよく見かけたが、経済発展し、交通量も多い今ではどうだろうか。

（※9）聖隷福祉事業団が1979年から7年間運営した難民受け入れ施設。日本がまだ難民条約を批准するより前に日本赤十字社を通じてベトナム難民の受入れを行った。愛光寮には総勢246名のベトナム難民が入所し、半数は米国に渡ったとのこと。この愛光寮の記録が「青い鳥の夢」という写真集として浜松市の図書館で閲覧できるそう。「難民事業本部HP より）

（※10）浜松市において、ベトナム難民の母と言われる女性。本誌35の出会いでも紹介。古希のお祝いの時には、300人を超えるベトナム人が集まり、古橋さんに感謝を表していた。